

●マティアス・ピンチャー (1971~)

『光の諸相』

チェロとピアノのための (2012~15)

『光の諸相』の第1部「いま I」はソロ・ピアノのための曲であり、この第2部「いま II」はソロ・チェロのための曲、そして最後の第3部「ウリエル」は、これら2つの楽器の合奏となっている。

これらの3曲はいずれも、20世紀の抽象表現主義者のひとりとして知られるアメリカの芸術家、バーネット・ニューマン(1905~70)の仕事からインスピレーションを受けて作られたものである。ニューマンの仕事は、[余分なものを]切り詰めて本質に着目するはどういうことか、同時に、もっとも直接的な表現に切り込むはどういうことか、それらの意味についてのわたしの芸術的理説に強い影響を及ぼしてきた。

●第1部「いま I」ソロ・ピアノのための (2015)

「いま I」は、ピエール・ブーレーズの90歳を祝して作曲された。ニューマンは、1947年の有名な芸術論「崇高はいま」にこう書いている。「われわれが産み出すイメージは、実在的で具体的な、ひとつの自明な啓示であり、歴史という郷愁に彩られた眼鏡なしに見る人々であれば誰にでも理解されうるものである。」(三松幸雄訳)

自分の演奏経験・聴取経験、また自分 [の認識] を条件づけていけるものをできるだけ忘れてしまおうと試みるなら、この音楽はたちどころに [聴き手にとっての] 強烈な経験となって姿を現す。

[マティアス・ピンチャー／藤田 茂 訳]

初演 2015年8月23日 ルツェルン・コンツェルトザール

アンサンブル・アンテルコンタンボラン、ルツェルン音楽祭アカデミー受講生
委嘱 ルツェルン音楽祭(ピエール・ブーレーズ90歳の誕生日を記念して)

●第2部「いま II」ソロ・チェロのための (2015)

ニューマンの絵画のいくつかに、わたしは強烈に燃焼する光の質を見るけれども、しかし [わたしを捕らえるのは] むしろここにある「暗

き燃焼」とでもいったものである。似たようなものを探すならフランス・シーベルトの後期の音楽がそうで、見たところ至福の調号のもとに書かれているものでさえ、厳謹さと郷愁(ノスタルジア)の層を隠している。

「いま II」のチェロは、この状態を担うのに非常に適切な楽器だとわたしは思う……チェロをピアノが伴奏する場合 [はなおさらで] このときピアノはときにチェロの共鳴体のような機能を果たすし、[もつといえ] チェロに取りつけられたアリコート張弦 [演奏には用いない、豊かな音色を得るための追加の弦] のような機能を果たすと言えるからかもしれない。

これは共鳴を扱う作品、人間の内部と人間の諸条件、つまりは、人生それ自体の外側で起こるものとの共鳴を扱う作品なのである。

[マティアス・ピンチャー／藤田 茂 訳]

初演 2015年8月26日 モーリッツブルク音楽祭(ドイツ)

ヤン・フォーグラー(チェロ)
委嘱 モーリッツブルク音楽祭

●第3部「ウリエル」 チェロとピアノのための (2012)

「ウリエル」というタイトルは示唆的である。大天使ウリエルはユダヤ教でもキリスト教でも役割をもっている。この天使は、一方で神の光と栄光のシンボルであり、他方で精神、魂、知性の [神の光による] 照明を象徴している。この瞑想的で穏やかで流れるような二重奏による強く表出的な線は、静寂のスクリーン上を動く夢のようなウリエルを描いている。

[マリー・ルイーズ・マイント／藤田 茂 訳]

初演 2013年1月21日 フランクフルト旧オペラ座(アルテオーパー)
アリサ・ワイラースタイン(チェロ)、イノン・バルナタン(ピアノ)

出典 ベーレンライター

※[]は訳者による補足

●マティアス・ピンチャー (1971~)

『音蝕』

ソロ・トランペット、ソロ・ホルン、アンサンブルのための (2009~10)

『音蝕』は、マティアス・ピンチャーが作曲したアンサンブルのための三連作である。その最初のふたつである「天体 I」と「天体 II」は、シャルーン・アンサンブルによってベルリン、ならびに、ベルリン・フィルのサマー・アカデミーが開講されたツェルマットで初演され、第3曲の「掩蔽」は、クラングフォルム・ウィーンが25周年を迎えた2010年に、同アンサンブルによってヴィッテンで初演された。

蝕とは、ある天体が別の天体の上を通過し、[一方が他方と完全に重なる] 皆既蝕になると、結果的に [隠された天体の光が] 遮光されることであるが、この現象は、まったく異なる諸要素が収斂していって最後に一瞬、融合するという作曲上のプロセスの象徴となっている。ピンチャーは次のように述べている。「この曲のアイデアは次のようなものだ。第1曲ではトランペットがソロを引き受け、第2曲ではホルンがソロを引き受ける。これらの2曲の素材はまったく異質なものではあるけれども、第3曲では、大まかにいえば両者の旋律的輪郭が重ね合わされ、それらの一致が達成されたところで、両者が融合する。同じ金管楽器に分類されながら非常に異なる2つの楽器の可能性を探求すること、また、これらの楽器に従来とはまったく違った響きを得させることに興味をもった。トランペットとホルンに割り当てられた響きと音形は最初まったく異質なものであるが、これらの足並みが徐々に揃えられて、最後にはアンサンブルもまたそのプロセスに組み込まれ、結果、すべてがひとつの声、ひとつの楽器、ひとつの身振りに収斂し、そして、幕切れとなる。比喩的な意味で、これはまさしく音楽の蝕である。」

ピンチャーは、連作的なるもの、すなわち、相互に関連する主題をもった複数の部分からなる作品に興味をもち、これによって作曲家として前に歩み続けるとする要求に応えている。「わたしには、完成したばかりの作品の作曲を継続して行いたいと望むところがあります。これは、まったく新しい課題に手を伸ばすことであり、かつ、ある状態から次の状態へと有機的に歩みを進めることもあるのです。」

「掩蔽」は『音蝕』の第3部のタイトルである。そこで意味されているのは、太陽と月という2つの天体が互いに互いを横切る日蝕において太陽の光が遮光される瞬間である。「掩蔽」では、この連作の最初2つの部分で用いられていた音楽素材が、ピンチャーいわく「圧縮され、互いが互いのうえに重ねられる。フーガの追迫部(ストレット)を思わせるかたちで、「天体 I」の音楽素材と「天体 II」の音楽素材は、結合、合併、交換される。それらは相互に接近して置かれて、互いを見紛うばかりに重なり合う。」「天体 I」のソロ・トランペット・パートの扱いと、「天体 II」のソロ・ホルン・パートの扱いは異なっている。「天体 I」のトランペットは、「より軽く、より流れるよう、よりジョコソ・コン・ブリオ [生き生きと陽気に] であり、花が次々と開き、花綱が編まれていくような装飾的な線を奏する。」「天体 II」のホルンは逆に、息の長い、旋律性の豊かな線で演奏する。ホルンに用いられるテクニックの種類は、最弱音での演奏から、フラッター・タンギング、[管の開口部に手を差し入れる] ストップ奏法、音を出さずに息を吹き込む奏法などの特殊奏法、そして、表出力のある大きなアーチを描き出す演奏まで、広範囲にわたる。逆にトランペットは、実験的な演奏、ヴィルトゥオーゾ風の演奏を行う。そして「掩蔽」で、これら両極端のものが接合されるのである。トランペットとホルンそれぞれの特徴的な旋律的輪郭が互いに結び合わされ

て、「最後にはホルンがヴィルトゥオーゾな身振りを示し、トランペットが線的な身振りを示す。アンサンブルも、この両者がひとつになる収斂のプロセスに組み込まれ、これが成就したところで、アンサンブル全体が幕切れを迎える。」

『音蝕』は色彩のたいへんな豊かさをもった音楽ではあるが、[アメリカの芸術家、サイ・トゥオンブリーの絵画『ヴェール論 Treatise on the Veil』からインスピレーションを得た] 一連の『ヴェール論のためのスタディ Studies for Treatise on the Veil』における弦楽器の扱いに見られたように、音の境界が溶融して[認知できなくなって] しまう限界を探求しようとするものではなく、感覚的に認知可能な輪郭線を探求するものである。ピンチャーはこの作品において、作曲家としての自身の考えが進展し、音楽の表現の直接性に向けて一步踏み出したと見ている。この作品においては、彼の音楽は、もはや絵画や文学を質的に描出しようとはしない。同時に、[これまでにあった] 金線細工を思わせる繊細さと特徴的な控えめさを示すスタイルからの離脱も起こっている。ピンチャーは『ヴェール論のためのスタディ』のタイトルにはまだ標題的に含意されていた、ヴェールに包む [ばかしの] 原理から、いまや離脱するのである。

※[]は訳者による補足

【マリー・ルイーズ・マインツ／藤田 茂 訳】

●第1部「天体 I」

Solo Trp – Fl (A-Fl / Picc) / E-Hrn / 2 Cl (Bs-Cl) / C-Fg – Hrn / T Bs-Trb – 2 Perc (I=Mar / Tubular Bells / Crotal / Tam-Tam / 2 Suspended Cym / 3 Metal Blocks / 3 Wood Blocks / Guiro / Spring Coil / Sandpaper Blocks II=Vib / Crotal / 2 Tam-Tams / 2 Suspended Cym / High Laying Gong / Bass Drum / 5 Temple Blocks / 4 Bongos / Spring Coil / Sandpaper Blocks / Flexatone) – Hrp – Pf – Strings

初演 2009年5月20日 クラウディオ・アバド生誕75周年記念コンサート(ベルリン)
マティアス・ピンチャー(指揮)、シャルーン・アンサンブル

●第2部「天体 II」

Solo Hrn – Fl (A-Fl / Picc) / E-Hrn / Cl / Bs-Cl / C-Fg – Trp / T Bs-Trb – 2 Perc (I=Mar / Tubular Bells / Crotal / Tam-Tam / 3 Suspended Cym / 3 Metal Blocks / 3 Wood Blocks / Guiro / Sandpaper Blocks / Cowbell / Small Drum / Bongo II=Vib / Crotal / 3 Tam-Tams / 2 Suspended Cym / High Laying Gong / Bass Drum / 4 Bongos / Spring Coil / Sandpaper Blocks) – Hrp – Pf – Strings

初演 2009年9月12日 ツェルマット・フェスティバル(スイス)
マティアス・ピンチャー(指揮)、シャルーン・アンサンブル

●第3部「掩蔽」

Solo Hrn – Solo Trp – Fl (A-Fl / Picc) / E-Hrn / Cl / Bs-Cl / C-Fg – T Bs-Trb – 2 Perc (I=Mar / Tubular Bells / Crotal / Tam-Tam / 3 Suspended Cym / 3 Metal Blocks / 3 Wood Blocks / Guiro / Sandpaper Blocks / Cowbell / Small Drum / Bongo II=Vib / Crotal / 3 Tam-Tams / 2 Suspended Cym / High Laying Gong / Bass Drum / 4 Bongos / Spring Coil / Sandpaper Blocks) – Hrp – Pf – Strings

初演 2010年4月24日 ヴィッテン現代室内楽音楽祭(ドイツ)
ペアト・フラー(指揮)、クラングフォルム・ウーン